

文化財の 世界に活かす日本の技術 保存と修復

開催趣旨

文化財は人類共通の遺産であり、国家、民族を越えて保護しなければなりません。そのためには国際協力が不可欠で、この分野で進んだ理念と技術を有する日本の果たすべき役割は大きいものがあります。これまでも多くの国際協力事業が行われており、日本の伝統技術やハイテク技術が使われています。ただし、この場合、日本の技術を単純にそのまま応用できるわけではありません。個々の文化財の材質、地域環境、社会的・宗教的背景、経済状況、人材などを勘案し、現地に適した応用技術の創意、工夫が必要です。

本シンポジウムでは、世界の文化財の保存、修復に日本の技術がどう活かされているのか、また、どんな問題点があり、その克服のためにどのような研究、努力がなされているのかについて、事例をあげて紹介します。本シンポジウムを、文化財保護のたいせつさと国際協力の意義、あり方を考えるよいきっかけとしていただければ幸いです。

主催 文化財保存修復学会

後援 文化庁 / 日本文化財科学会

全国大学博物館学講座協議会 / 国宝修理装演師連盟

日本イコモス国内委員会 / 讀賣新聞社

会場 昭和女子大学・人見記念講堂

	司会進行	元興寺文化財研究所 村田 忠繁	
9:40~10:00	開会挨拶と基調講演	日本の技術がどう活かされているか 会長・実行委員長 / 独立行政法人国立博物館・九州国立博物館(仮称)設立準備室	三輪 嘉六
10:00~10:50	特別講演	世界の文化遺産の保護：日本に期待されるもの 早稲田大学	吉村 作治
10:50~11:00	休憩		
	座長	東京芸術大学 稲葉 政満	
11:00~11:30	世界に広がる装束技術による修復技法	昭和女子大学	増田 勝彦
11:30~12:00	日本の建造物修理技術を活かす	インドネシアの木造建造物保護をめぐって 文化庁文化財部建造物課	大和 智
12:00~12:30	アンコール遺跡保存修復で生きる日本の技術	早稲田大学	中川 武
12:30~13:30	昼食		
	座長	奈良文化財研究所 村上 隆	
13:30~14:00	交河故城の保存修復と日本の技術	(株)文化財保存計画協会	矢野 和之
14:00~14:30	ガンダーラ仏教寺院遺跡の保存と日本の技術	東京文化財研究所	西浦 忠輝
14:30~15:00	イースター島モアイ像の保存修復と日本の技術	奈良文化財研究所	沢田 正昭
15:00~15:15	休憩		
15:15~16:45	パネルディスカッション	世界の文化遺産の保存に日本の技術をどう活かすべきか コーディネーター 三輪 嘉六 パネリスト 増田 勝彦 / 大和 智 / 中川 武 / 矢野 和之 西浦 忠輝 / 沢田 正昭	
16:45~16:55	総括		三輪 嘉六
16:55~17:00	閉会の辞	実行副委員長 / 東京文化財研究所	西浦 忠輝

基調講演 日本の技術がどう活かされているか

文化財保存修復学会会長・実行委員長 / 独立行政法人国立博物館・九州国立博物館(仮称)設立準備室 三輪 嘉六

日本の文化財の保存修復の歴史は長い。しかしその修理は「文化財」という意識のなかで培われてきた技術や手法ではなく、人々のごく日常生活のなかで育てられ、継承されてきた工夫や手法が多い。もともと建造物や美術工芸品が文化財として位置づけられるようになってからまだ100年あまりしか経っていない。明治30年に制定された「古社寺保存法」は、文化財の保存のあり方を指定制度でもって進むことにした一方、その第1条に荒廃してゆく文化財を保存してゆくにはまず修理が必要であることを掲げた。普通、法律の第1条は法の目的や定義を述べるところであるが、それにかかって修理を規定している。文化財の保存と修理の関係を積極的に示した典型であるが、同時にわが国の各種文化財に対する修理のあり方や考え方が定まってくるのもこんな時期からといえよう。

そして、その多くがいまでは伝統的保存修理技術・技法といわれているもので、屏風や掛軸、典籍や古文書など紙製文化財などに継承されている。建築関係にしても寺院や神社建築の修理でよくいわれる宮大工などの匠の世界や漆芸品の修理などもそれに相当しよう。

一方、これに対して現代の科学的な研究成果を応用した新しい展開もあり、実際の修理現場で数々の実績を上げている。おおむね文化財の「修理」とは、接合・接着に帰するが、例えば各種の合成樹脂の修理への活用はその一場面である。高分子化学の発達に導かれた合成樹脂の文化財修理への応用は修理の世界に新しい視点をもたらしてきた。そしてそこには文化財の材質に影響を与えない使用方法などの修理の倫理規程にまで配慮した修理技術・手法も定着化し、またヴェニス憲章にみられる「修理の可逆性」や奈良コンファレンスでの「Authenticity」などの修理の国際的な倫理理念をとりこみながら、保存修理が進められている。

こうして日本における文化財の修理は伝統的、保存科学的そしてこの両者を混在させて発達してきたが、これらを国際社会のなかでどのように活かしてゆくか、つまり文化財の修理・修復を通じてどのような国際貢献をはたしているのか、このあたりの活動が必ずしも一般社会のなかで十分に理解され、みえているわけではない。ここでは国際社会で行われている各種文化財の保存修復に日本の技術や考え方がどのように活用されているのかを披瀝してゆきたい。

21世紀の考古学にとって最重要課題は文化遺産の保存だと言われている。私達もそれに沿ってエジプトに於いて、王家の谷のアメンヘテブ3世王墓内壁画の修復プロジェクトと、アブ・シール南というところで遺跡の保護や保存をどのように行なうのかのフィジビリティ・スタディを行なっている。又、ダハシユール北というところでは、出土品の修復・復元・保存を行なうなど実際の調査活動の中で実践している。しかし、一口に保存といっても材質や年代、周囲の環境などによってさまざまな要因が重なり合って簡単にはいかないのが現状である。今私達が手がけなければならないもののうち、ギザ台地、クフ王のピラミッドの南面の地下に眠っている第二の太陽の船の保存がある。これは1987年に電磁波地中レーダーで見つけ、1990年にファイバースコープを使って確認した紀元前4650年頃の木造船である。木の材質の保存は日本人は得意に違いないという信用を受け、早稲田大学理工学総合研究センターの中に研究チームを作り主に技術的な面を研究している。こうしたプロジェクトに対しエジプト政府文化省考古最高会議(日本の文化庁のような機関)は日本の高い科学技術力に期待を寄せてくれてはいるのだが、私達としては初めての局面が多く、数々の試行錯誤を重ねながら進めている。今後の私達のプロジェクト進行に特に重要なことは、保存先進国からの技術移転を進めると同時に日本人からエジプト人修復家への再移転まで行なう必要があると思われる。もちろん文化省にも修復保存のセクションがあり技術者もいるのだが、対象とするモニュメントの多さに比べ圧倒的に人材が少ないという現実があるので、その一助を私達が行なう必要があると思う。



アメンヘテブ3世墓内で壁画の修復を行っている早稲田大学エジプト学研究所の活動風景(エジプト・ルクソール西岸王家の墓)

世界に広がる装演技術による修復技法

昭和女子大学 増田 勝彦

1960年代以降、世界の美術館などに所蔵されている、紙を素材とした文化財、すなわち、版画・素描・水彩画・版本・書写本・文書・教典・設計図・手紙・ポスター・地球儀などの保存に対する関心が高まった。長期保存に耐える表紙用布、製本用革、修復用接着剤などについて検討が加えられ、改良されるなかで、素材としての和紙もとりあげられた。

安定性があり、適度な強度をもち、経済的な価格で購入でき、取扱いが複雑でなく、処置の対象と感覚的・視覚的に似ている、などの性質を備えた保存修復処置用素材として、再認識されたのである。

和紙は、薄くて丈夫なので、裏打ちや補修に利用しやすい。ヨーロッパの厚い手漉紙に和紙で補修すると目立たず、折り曲げに耐えるので、製本修理の際の綴じ部分強化に使える。

保存処置用素材として和紙が検討され採用されるなかで、その和紙を使用している技術、装演・表具技術にまで関心が及んだ。加えて、酸性紙問題が大きくとりあげられ、和紙の中性・アルカリ性が積極的に評価されるようになった。

世界の紙製文化財保存の専門家は、自分の国の文化財を護るために、日本の素材(和紙)と技術(装演技術)を自分の国の文化財に適応させようとしたのである。日本の和紙と装演技術が、日本の文化財に対してだけでなく、世界の文化財保存のために適応できると認められたのである。

独立行政法人・東京文化財研究所は、海外で行われる紙保存研修に講師を派遣したり、国内に専門家を招聘して実技研修を行うとともに、海外で適用されている様子を報告しあうセミナーを開催した。今回は、そのセミナーでの発表を中心に、海外における装演技術適用の事情を解説する。



ルネサンス期の文書を和紙で修復する
(フィレンツェ文書館)

日本の建造物修理技術を活かす インドネシアの木造建造物保護をめくって

文化庁文化財部建造物課 大和 智

インドネシアは、地理的、民族的、宗教的な多様性を背景に、長い歴史のなかで多彩な建造物を創造してきた。ヒンドゥー・ジャワ芸術の精華であるポロブドゥール、プランバナンといった大規模な組積造建築は世界遺産にも登録され、王宮や近世以前のモスク、各地の伝統住居およびこれらによって構成される集落や町並みなど木造の遺産は、豊かでユニークな建築文化の基層を形成している。これらのうち、組積造の遺跡が早くから注目されてきた一方で、木造の伝統建築は文化遺産としての認識が一般に希薄であり、十分な保護措置が講じられていない現状にある。

こうした状況を踏まえて、文化庁とインドネシア文化観光省文化保護振興局は、平成7年度より木造建造物の保存修復にかかわる交流事業を行っている。これまでインドネシア国内の木造遺産についての共同調査、インドネシア技術者の日本における研修、木造建造物保護のワークショップなどの活動を継続して行い、現在は、スンパワ島の旧王宮について共同で保存修理工事を実施することを目指し、修理計画案を策定中である。



スンパワ島旧王宮(スンパワ・ブサル)
1885年建設の木造大建築。高床、妻入りの建物を2棟並べたような特徴あるつくり。軸部の歪みなど破損が進んでいる

こうした交流を通じて、わが国の伝統技法を中心とした保存修理、修理技術者・技能者育成の努力、木造家屋による集落・町並みの保存など、木造建造物保護について100年以上培った蓄積は、人工樹脂、防虫・防腐処理など科学的対応が保存の基本であるインドネシアにも新たなアプローチとして受容されつつある。一方で、早くから西欧の保護理念、保存手法を導入したインドネシアにおける遺産保護のあり方は、この分野の国際的な場における動向を明確に顕していて日本側にとって参考になる。

小規模なパイロット的な事業だが、お互いの顔のみえる交流は、保存修理の体系や背景の異なる両者の相互理解と課題の改善に貴重な機会となっている。交流を通じて両国の文化遺産保護における新たな連帯、さらにアジアにおける木造建造物保護の手法や理念の深化を目指している。

アンコール遺跡保存修復で生きる日本の技術

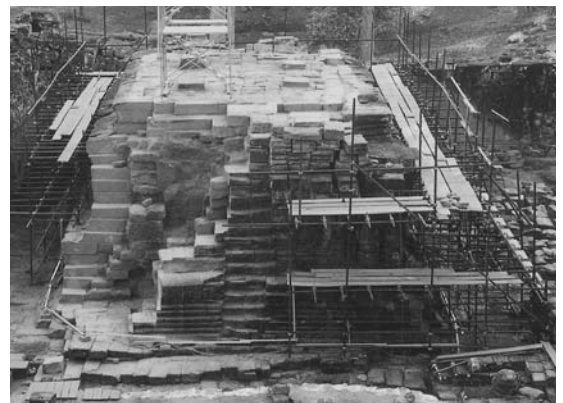
早稲田大学 中川 武

アンコール遺跡の素材は砂岩、ラテライト、レンガである。日本の木造文化財建造物の保存修復技術については内外とも定評があるが、私が、日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JSA)のプロジェクト予備調査を始めた1992年から、プロジェクトが正式にスタートした94年以降97年ごろまで、日本がなぜアンコールを?という疑問や異議を直接、間接に何度か聞いた。文化遺産の保存修復技術にとって、その素材に関する豊富な歴史的体験は有意義であることは当然である。しかしこの問題は一般論で議論してもあまり意味がないことを私は短い体験で痛感した。

1999年9月に竣工したバイヨン北経蔵の部分解体修復工事を通して、まず直接活かされた日本の技術についてみる。

アンコール遺跡の主要な構成材である砂岩はすべて、目地剤を使わない、空積みで、摺り合わせ工法をとっている。この砂岩の解体、再構築工事は、灯籠や石塔などを手がけた日本の伝統的な石工技術の手順が役立った。また、北経蔵だけでなくほぼすべての建物の基壇は、外側に砂岩の壁をたて、その内側にラテライト壁、さらに内側を版築土層としている。この土層について、あまり沈下していない中央部はそのまま保存し、端部のみ解体し、新材により修復することとしたが、同様の構成材と工法では800年以上締め固めた中央部の土層と同調するような強度とねばりをだすことができない。そこで、日本のたたき工法の長い体験とその技術に対する研究蓄積が活かされることになった。

しかし、日本の技術がもっとも活かされたのは、個々の技術の幅広い組合わせや、固有の問題解決のための研究能力の高さ、そして、調査、技術移転、データの公開など、つまり総合力が問われる場面にこそあったと思われる。



アンコール・トム、バイヨン北経蔵の基壇を発掘調査のために部分解体した(西側より)

交河故城の保存修復と日本の技術

(株)文化財保存計画協会 矢野 和之

交河故城の保存事業は以下の内容であった。

考古調査、歴史調査、測量、微気象観測、崖面の崩壊防止の施工実験、西北小寺院の修復(土建造物の修復)、西北小寺院の復元展示、堤防工事、圍路整備、屋外展示・案内施設整備

このなかで、日本側と新疆側とではいくつかの点で方針の相違がみられた。それは、保存・修復・整備にかかわる考え方の相違や記録や分析の精度の違いからくるものである。

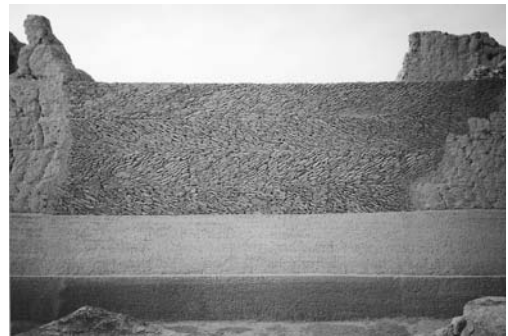
記録：交河故城は遺跡全体の測量図の詳しいものがなかったので、1/500の測量図を作成した。これはそれまでの地図からみると、画期的なものであったが日本の水準から比べると低いものといわざるをえない。

また、西北小寺院を修復の対象として、奈良文化財研究所により修復前の詳細な写真測量が行われた。これは土建造物の記録としては高度なものであり、たんに形態の記録のみならず、どのようにつくられたかという工法の記録、改変痕跡の記録も読みとれるものである。

修復：西北小寺院の修復は、修復は伝統的工法によるという考え方にのっとって行った。今回は版築泥法・版築夯土法という工法を用いた。これは現地住民の雇用にも役立つと考えられる。

保存処置：広大な遺跡すべてに保存処置を行うことは事実上不可能であった。ただし今後の保存計画のデータをえるために、保存処置試験は中国によって行われた。今後日本などで新たに開発された薬剤の現地試験に道をひらくようにすべきであろう。

復元展示：西北小寺院は現地で復元するというのが新疆の案であったが、オリジナル部分を一部削ったりして改変せざるをえない、遺跡景観が破壊されるという理由で日本側が反対し、遺跡外に復元し展示することにした。この設計をまとめるとき役立ったのは、日本の建造物修復で行われている「痕跡を調査して実証的な復元考察をする」という手法であった。日本では一般的な記録や修復に対する考え方、技術、精度が現地にどう受け入れられるか、十分な話し合いが必要である。



修復中の西北小寺院東面

5

ガンダーラ仏教寺院遺跡の保存と日本の技術

東京文化財研究所 西浦 忠輝

パキスタンのガンダーラ地域は、東方文化と西方文化が融合し、仏教文化が華開いた歴史的に重要な場所です。精緻な仏教彫刻の美しさはよく知られています。この地には、たくさんの貴重な仏教寺院建造物遺跡が残されていて、タキシラやタフティバイはユネスコの世界遺産に登録されています。しかし、多くの仏教寺院遺跡は、構造的に不安定であるため、発掘直後から、風雨に曝されることによって、短期間のうちに崩壊してしまいます。ですから、本格的な保存修復対策が必要なことはいうまでもありませんが、当面の応急保存処置がきわめて重要なのです。しかし、この処置が十分行われなかったために、すでに崩壊、消滅してしまった遺跡も少なくありません。

応急保存処置としては、雨水の浸透を防止するのが基本です。従来、この目的のためには、覆屋の仮設以外では、セメントモルタルによる遺構上部の被覆(キャッピング)が行われていて、確かに効果を上げています。しかし、セメントの不可逆性、含有塩類の影響、異なる質感などから、その使用は勧められません。そこで、セメントモルタルにかわるものとして、日本の伝統的土壁工法と最新の無機系樹脂による防水処理とを合わせた方法を開発し、大規模仏教寺院建造物跡として知られるラニガト遺跡において、現場実験を行ったあと、実際に施工しました。

ここでは、本方法の基本的考え方と、実際の処置の結果について報告します。



パキスタン・ガンダーラ地域のラニガト遺跡における、伝統的土壁工法を応用した新しい保存処置施工

イースター島モアイ像の保存修復と日本の技術

奈良文化財研究所 沢田 正昭

世界文化遺産のひとつ、モアイ石像はチリ領イースター島にある。小豆島程度の小さな島に数十の祭壇と約700体のモアイ石像が祭られていた。島にはラノ・ララクという山があり、モアイ石像制作のアトリエがあった。火山性の凝灰岩からなる山肌にじかに石像を刻み、全島に運び、祭ったらしい。じつは、ほとんどの石像はヨーロッパ人や島民間の争いに巻きこまれて破壊され、倒壊している。1955年、ノルウェーのトール・ヘイエルダールが4人の考古学者をともなってこの遺跡の調査に訪れており、多くのモアイ石像がうつぶせの状態に倒れていたと記している。

今回修復した遺跡は、1960年のチリ地震で起きた津波のために攪乱されたアフ・トンガリキ遺跡である。15体の石造が並ぶ、島で一番大きな遺跡である。散乱したモアイ石像は、像高4~8m、推定重量30~50トン級の巨大像である。石像の大半は倒されたときの衝撃で首のあたりで折れている。修理内容は、石像全体を強化処理し、破断面を接合することである。そして、クレーンで吊り上げて祭壇に載せ、起立させる。巨大石像の起立作業には、日本の石工の技術が活躍した。破断面の接合材料には新しく開発した日本製の合成樹脂が使われた。凝灰岩は漆喰や石膏のように湿気を吸収したり放出する性質がある。これを接合する材料には、同じように吸放湿性が求められた。石像本体も強化したあと、なお凝灰岩と同じ物性をキープしていることが望ましい。今回の修理では石像を起立させたものの、石像の本格的な強化処理は後回しとなった。過去5年間の実験結果をふまえて、来年強化処理が実施される運びとなっている。



再建されたアフ・トンガリキ遺跡のモアイ石像
像本体の強化処置はこれから行われる

修理内容は、石像全体を強化処理し、破断面を接合することである。そして、クレーンで吊り上げて祭壇に載せ、起立させる。巨大石像の起立作業には、日本の石工の技術が活躍した。破断面の接合材料には新しく開発した日本製の合成樹脂が使われた。凝灰岩は漆喰や石膏のように湿気を吸収したり放出する性質がある。これを接合する材料には、同じように吸放湿性が求められた。石像本体も強化したあと、なお凝灰岩と同じ物性をキープしていることが望ましい。今回の修理では石像を起立させたものの、石像の本格的な強化処理は後回しとなった。過去5年間の実験結果をふまえて、来年強化処理が実施される運びとなっている。

6

講 演 者 紹 介

三輪 嘉六(みわ かるく)

独立行政法人国立博物館・九州国立博物館(仮称)設立準備室長
1938年生まれ。

日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同文化財鑑査官を経て、98年より現職。専門は考古学、博物館学、文化財学。文化審議会、文化財分科会の各専門委員、独立行政法人評価委員会委員(文化分科会)をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員。99年から文化財保存修復学会会長に就任。

著書に、『日本馬具大観 ~ 巻』(編著、吉川弘文館)、「家型はにわ」『日本の美術』(至文堂)、「美術工芸品をまもる修理と保存科学」『文化財を巡る科学の眼 5』(国土社)、「Horses in Ancient Times」『Horses and Humanity in Japan』(The Japan Association for International Horse Racing)、「文化遺産危機管理的基本課題」『1999台湾集々大地震 - 古蹟文物震災修復技術諮詢服務報告書 - 』(台湾国立文化遺産保存研究中心)など。

吉村 作治(よしむら さくじ)

早稲田大学人間科学部教授、早稲田大学エジプト学研究所所長。工学博士。

1970年早稲田大学第一文学部卒業、カイロ大学考古学研究所留学。早稲田大学非常勤講師、助教授を経て、96年より人間科学部教授。

大学在学中の1966年、早稲田大学古代エジプト調査隊を組織し、エジプト全土をゼネラル・サーベイする。71年ルクソールにおけるマルカタ南「魚の丘」遺跡において彩色階段を発

見し、続いて、クルナ村の貴族墓やギザ台地での調査などを行う。現在では、ルクソール、王家の谷・西谷、アフ・シール南遺跡、ダハシュール北遺跡の発掘調査を手がけている。専門はエジプト美術考古学。

著書に、『古代エジプト講義録』(上・下)(講談社)、『エジプト発掘30年』(平凡社)、『ピラミッドの謎』(講談社)、『古代エジプトを掘る』(PHP文庫)、『エジプト美の起源・カイロ博物館入門』(小学館)など。

増田 勝彦(ますだ かつひこ)

昭和女子大学大学院教授

1965年東京教育大学農学部林学科卒業。同年4月から遠藤得水軒で絵画・文書修復に携わり、73年から東京国立文化財研究所修復技術部研究員、同部長を経て、2001年より現職。

専門は紙と布を素材とした文化財の修復技術。

発表論文・著書に、「Micro dots adhering for paper conservation and offset application of paste」IIC 19th International Congress Baltimore(2002年)、「美術工芸品の保存・修復の現状と課題 - 絵画・文書を中心に - 」『文化財の保護第34号』(東京都教育委員会、2002年)、「受託研究報告 - 藩札料紙の研究 - 」『保存科学37号』(1998年)、「和紙とはどういう紙ですか」『和紙の手帖』(1996年)、「装潢の技術」『修復記録』『在外日本美術の修復』(中央公論社、1995年)など。

大和 智(やまと さとし)

文化庁文化財部建造物課主任文化財調査官(主に国宝・重要文化財の指定を担当)

1977年東京工業大学工学部建築学科卒業、84年東京工業大学理工学研究科建築学専攻博士課程中退。東京工業大学工学部建築学科助手を経て、87年より文化庁勤務。

専門は日本建築史、建造物保存修復。

著書に、『日本建築の精髓桂離宮 日本名建築写真選集19巻』(新潮社、1993.7)、『歴史的建造物の活かしかた』(共著/学芸出版社、1999.7)、『日本の美術 No.405 城と御殿』(至文堂、2000.1)など。

中川 武(なかがわ たけし)

早稲田大学理工学部建築学科教授、日本国政府アンコール遺跡救済チーム団長。工学博士。

1972年早稲田大学理工学研究科博士後期課程修了。早稲田大学理工学部助教授を経て、83年より現職。

専門は比較建築史。特にアジアの文化遺産の保存修復に関心をもつ。

1945年カンボジア・サハメトレ賞受賞。

著書に、『建築様式の歴史と表現』、『日本の家』、共著書に、『アンコールの神々BAYON』など。

矢野 和之(やの かずゆき)

株式会社文化財保存計画協会代表取締役、駒沢大学文学部歴史学科非常勤講師。

1969年武蔵工業大学建築学科卒業、同大学院建築学専攻(修士・博士)修了。

専門は文化財保存計画、日本建築史。主に文化財(史跡、文化財建造物など)の保存修理・整備の計画、設計、歴史を活かしたまちづくり計画立案、海外の遺跡の修復の技術指導に携わっている。

著書に、『甦る古墳文化』(サンポージャーナル)、『空間流離』(建築知識社)共著書に、『パッシブ設計手法事典』(彰国社)、『歴史のまちのみちづくり』(交通計画協会)などがあるほか、『重文熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』、『史跡観音山古墳保存修理工事報告書』など、報告書多数。

業務経歴に、史跡観音山古墳、重文熊本城宇土櫓、熊本城数寄屋丸二階御広間、史跡志波城跡、交河故城(中国・トルファン) 特別史跡登呂遺跡、史跡出島和蘭商館跡、大明宮含元殿(中国・西安)、西都原古墳群、ファヤーズテバ遺跡(ウズベキスタン)、クムトラ千佛洞(中国)

西浦 忠輝(にしうら ただてる)

独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター・センター長代理(地域環境研究室長)

1970年東京農工大学卒。75年東京国立文化財研究所入所。修復技術部主任研究官、アジア文化財保存研究室長、国際文化財保存修復協力室長、国際文化財保存修復協力センター環境解析研究指導室長などをを経て、2001年より現職。ICOMOS(国際記念物遺跡保存会議)石造物専門委員会副委員長。九州国立博物館(仮称)諸機能検討会指導助言者。

専門は保存科学。現在は文化財保存国際協力事業を担当。中国、タイ、カンボジア、パキスタン、エジプトなどで保存修

復プロジェクトを推進。

共著書に、『美術工芸品の保存と保管』、『文化遺産の保存と環境』、『アジア・知の再発見 - 文化財の保存修復と国際協力 - 』、『おもしろアジア考古学』、『文化財の保存と修復』、『世界の文化遺産を護る』などがあるほか、保存修復に関する論文多数。

沢田 正昭(さわだ まさあき)

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター・センター長、京都大学大学院人間・環境学研究科教授(併任)、学術博士。

1969年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程(保存科学専攻)修了。奈良国立文化財研究所文部技官、同センター研究指導部長を経て、99年より現職。

専門は文化財の保存科学。現在は中国古墳壁画および塑像の分析と保存修復に関心をもつ。

著書に、『遺跡・遺物の保存科学』、『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』(角川書店、1993)、『金堂壁画と保存科学技術』、『法隆寺金堂壁画』(朝日新聞社、1994)、『文化財の保存科学ノート』(近未来社、1997)、『やきものの調査研究法、顔料の調査研究法』、『日本の美術 No.400 美術を科学する』(至文堂、1999)など。

稲葉 政満(いなば まさみつ)

東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存科学助教授

1985年東京大学大学院農学系博士課程修了。岐阜大学農学部助手、東京芸術大学美術学部助手、講師を経て、95年より現職。文化財保存修復学会運営委員、マテリアルライフ学会常任理事。

専門は保存科学、製紙科学。特に紙の保存性に関する研究。図書館や文書館の紙資料保存問題や和紙の技術発展史にも興味をもつ。

主な著書に、『図書館・文書館における環境管理』、共著書に、『保存科学入門』、『和紙の手帳』、『記録史料の保存と修復』、『考古資料分析法』、共訳書に、『博物館の環境管理』など。

村上 隆(むらかみ りゅう)

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所主任研究官。学術博士。

1978年京都大学工学部卒業、80年同大学院理工学研究科修士課程修了、85年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、88年同博士課程修了。日本学術振興会特別研究員を経て、奈良国立文化財研究所入所。文化財保存修復学会運営委員、日本文化財科学会評議員・幹事、京都造形芸術大学非常勤講師。専門は歴史材料科学。文化財保存科学の視点から、金工を中心に材料科学の手法を用いて材料と製作技法の歴史の変遷を追求している。

著書に、『色彩から歴史を読む』(共編、ダイヤモンド社)、『博物館の環境管理』(共訳、雄山閣)、『文化財は守れるのか』(文化財保存修復学会編)、『Japanese Traditional Alloys』(Butterworth)、『古代金工における金属接合技術』、『文化財論議』、『ミクロな眼で探るわが国金工技術の世界』(佛教藝術)など。

文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会(旧・古文化財科学研究会)の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にあって、「古文化財之科学」(柴田雄次編集)を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学的研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。(「入会のしおり」より)

連絡先

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7
昭和女子大学 光葉博物館内
Tel: 03-5432-0620 Fax: 03-5432-0622
E-mail: jsccp@sepia.ocn.ne.jp
http://www1.ocn.ne.jp/jsccp/

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会

委員長 三輪嘉六
副委員長 西浦忠輝
委員 稲葉政満・川口法男・杉山真紀子
村上 隆・村田忠繁
補佐委員 秋山純子・建石 徹

文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

文化財の保存と修復 伝統に生かすハイテク技術

文化財保存修復学会編 / B5変形版 / 112頁
ISBN 4-906347-05-3 / 本体価格 ¥ 1,400(税抜)
平成13年6月1日第1版発行

本書は平成12年10月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復 - 伝統に生かすハイテク技術」の講演収録集です。

美術工芸品の保存 文化財の保存修復における伝統技術と科学技術
横浜美術短期大学 / (財)美術院国宝修理所 西川 杏太郎

紙と絹 ハイテクでよみがえる伝統材料と技術
岡墨光堂 岡 岩太郎(興造)

絵画の修復とハイテク 名画に隠された秘密を探る
国立民族学博物館 園田 直子

見えないものを見る画像処理 国宝日光東照宮陽明門彩色の秘密
東京文化財研究所 三浦 定俊

大和古墳群の科学的調査 巨大古墳に眠る失われた伝統
奈良県立橿原考古学研究所 今津 節生

伝統技法と構造解析 唐招提寺金堂の修理
奈良県教育委員会 今西 良男

よみがえるか古代の大建築 古代出雲大社の復元
東北芸術工科大学 宮本 長二郎

総合質疑応答・討議

文化財の保存と修復 歴史遺産と環境

文化財保存修復学会編 / B5変形版 / 107頁
ISBN 4-87805-011-X / 本体価格1,400円(税抜)
平成14年6月10日第1版発行

本書は平成13年11月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復 - 歴史遺産と環境」の講演収録集です。

基調講演 歴史的環境の保存

日本大学 / 文化財保存修復学会会長 三輪 嘉六

特別講演 歴史と環境

京都造形芸術大学 芳賀 徹

主に遺跡の復元活用に関連して 文化財観光資源と環境
奈良文化財研究所 田辺 征夫

京町家の保存と再生 世界遺産京都の歴史的環境と景観論争
京都府立大学 宗田 好史

美術工芸品の修復をささえるもの 伝統的修復技術を取り巻く環境
京都府教育庁 石川 登志雄

人類の責任で解決を 地球規模の気候変動と歴史遺産
東京文化財研究所 西浦 忠輝

大気汚染から文化財を守れ 世界遺産奈良の大気環境
奈良大学・同大学院 西山 要一

美しい街の再生と創出 災害と歴史遺産
京都造形芸術大学 内田 俊秀

パネルディスカッション

<問い合わせ先>

(株)クバプロ内「文化財の保存と修復」事務局
〒102-0072 千代田区飯田橋4-6-5 NKS飯田橋ビル4F
e-mail: webmaster@kuba.co.jp http://www.kuba.co.jp
TEL 03-3238-1689 FAX 03-3238-1837